

2024 年度「アメリカ短期派遣プログラム報告書」

農学部・農学科・2 学年・40223023・向山季沙

1. 当初の目的

私が、短期留学プログラム・アメリカコースへ参加する目的は二つであった。

一つ目の目的は、アメリカでの果実に対する考え方を知り日本の果実観との違いを見つけ、そこから、日本人の果実摂取量が年々減少している問題を解決する方法を考えるためであった。

日本人の果実摂取量は減少しており、特に若い世代で大きく減少していることを知り衝撃を受けたことがきっかけである。

二つ目の目的は、英語のスキルアップである、特に農学に関する専門用語に触れるきっかけを得ることであった。この実学研修では農業を中心に英語を使用して学んでいくため、日本の英語の授業ではなかなか学ぶことのない専門用語に多く触れられると考えた。

2. 目的達成のために現地で活動した内容

<1 日目>

デトロイト空港に到着し、ロンダさんが迎えに来てくださっていた。その後車でホテルに向かった。近くの飲食店が多く並ぶエリアを学生皆で散策した後、ピザ屋で夕食を取った。

<2 日目>

MSU に向かい Agricultural and Natural Resources 学部所属のロンダさんとジェフさんの今後のプログラムについての説明と MSU の歴史についての授業を受けた。次に講師のレイチェルさんの英語の授業を受けた。

昼食は学長の江口先生と学食を食べた。その後 Meijer という規模の大きいスーパーマーケットで食材や MSU のロゴが入ったパーカーを購入した。

青果コーナーに日本ではあまり見られない、ランブータンやアーティチョークなどが売られておりどのような味がするのか気になり購入した。日本のスーパーよりも品ぞろえが豊富で、量り売りが行われており驚いた。

<3 日目>

レイチェルさんの英語の授業を受けた後、デイブさんの世界でのポテトの品種改良支援活動についての授業を受けた。技術をただ一方的に伝えるのではなく留学生や研究生の研究開発を支援していくことや、現地に赴き共同研究するような、その国の研究能力も向上させるような支援方法が、長期的な安定した生産力のために必要であるということを学んだ。

<4 日目>

ファーマーズマーケットに訪れた。出店が多く立ち並び、手作り石鹸、自家製ハチミツ、野菜、きのこなどが売られていた。出品者が手作りで製作しているものが販売されているため、作り方やおすすめの味や匂いなど会話が弾み交流が出来た。

昼食は MSU の学生達とピザを食べながら交流を行った。それぞれの所属学部や学部で行っていること、将来の夢や好きな音楽アーティストなど様々な話をした。

日本から持ってきたお菓子を紹介して皆で食べ、日本の文化についても紹介することが出来た。けろけろけろっぴを好きな学生がいたりして、日本のキャラクターの人気度合いや知名度の高さに驚いた。

<5 日目>

ホテルを出て Traverse City に向かった。道中広大なトウモロコシやダイズ畑やリンゴ農園を見ることが出来た。

Sleeping Bear Dunes に向かい、海と見間違えるほど広大な湖や、風によって砂が運搬されてできた砂丘などを散策した。その後 Visitor's center を訪れて砂丘の成り立ちや湖周辺に生息する自然の豊かさや歴史について映像を見て学んだ。

また土壌中には砂が多く含まれるため木が倒れやすく、今年のハリケーンで沢山の木が倒木してしまったと聞き、砂を含む土壌だからこそみられる光景に驚いた。

<6 日目>

MSU の園芸研究センターを訪れて、ニッキーさんからミシガンのフルーツベルトやリンゴの品種についての説明を受けた後、実際に農場を案内してもらった。

日本のリンゴの栽培方法と大きく異なり、摘花・摘果をほとんど行わずに生育を行っていたことに非常に驚いた。幼木でも摘花を行っていなかったため、果実の重みで大きく枝が曲がっていた。枝が折れたりすることはないのかと質問をすると、生育に大きな影響の出ない範囲でより多くの生産量を増やすための研究を行っているという説明を受けた。

日本の味や色など品質を重視した栽培方法とアメリカの生産量と効率化を重視した栽培方法の差がみられて非常に興味深かった。

<7 日目>

チーズ工場を訪れて、発酵前のチーズや完成後のチーズを試食した。チェリー味のチーズは地元でとれたチェリーを使用していると聞き、地元の特産品を積極的に商品に導入することは、他の特産品の紹介や他の生産者との交流のきっかけにもなると考えた。

<8 日目>

Traverse City のホテルをチェックアウトした後、ポテトチップス専用のジャガイモ農場に向かった。ジャガイモの皮の薄さ・傷つきやすさや、問題となっている害虫や病原菌について説明を受けた。実際に感染しているものや害虫を観察した。その後、低温や適切な湿度に保たれるジャガイモの貯蔵庫を見学した。農場が非常に広大で、使用されているスプリンクラーや貯蔵庫も大きくアメリカの農業の規模の大きさに圧倒された。

ホテルに戻った際に、長時間の車の運転や案内に感謝を述べるためにロンダさんとジェフさんにプレゼントと手紙を送った。非常に喜んでいただき感謝を伝えることが出来て非常に嬉しかった。

<9 日目>

レイチェルさんの英語の授業を受けた後、大学内の学生が管理するグリーンハウス

を訪れて説明を受けた、所属学科関係なくこの活動に興味がある学生は誰でも参加できると聞いた。学科を超えて学生と交流し、持続的な農業について意見交換が可能な機会があることに感心した。

<10 日目>

スパルタンスタジアムでアメフトの観戦をした。7万5千人が入るスタジアムということもあり、応援が非常に盛り上がった。学生たちのマーチングバンドも広いスタジアムによく響いていた。

<11 日目>

一日フリータイムの日であったため、ホテル近くのカフェでモーニングを食べた。エッグベネディクトを注文した、日本のものと見た目が異なり、ソースがお皿一杯にかけられていて程よい塩気で非常に美味しかった。

その後は大学内の美術館に向かった。現代アートを中心とした展示で、美術館を設計した方の作品も鑑賞することが出来た。展示物との距離が近く作品内を歩くことが出来るものもあった。

次にお土産屋や夜ご飯を購入するために、レイチェルさんにおすすめされた雑貨屋やスーパーを訪れてホテルに帰宅した。

<12 日目>

MSUのリサイクルセンターを見学した。大学で出たペットボトルゴミを圧縮したブロックや、野菜の切れ端などの生ごみからできた堆肥があるハウスを見学した。ゴミの分別をするバイトを学生が行っているという話を聞き実際に職場も見学した。

<13 日目>

レイチェルさんのお家に訪問した。お部屋を紹介していただいて、アメリカでよく食べられているオートミールやトースターでできるイチゴのパイなどを頂いた。庭ではマシュマロを焼いて食べ、ジップラインに挑戦した。

お昼をMSUの学食で食べた後、MSUの昆虫標本の展示や飼育されている昆虫を見学した。雌雄の区別方法やミツバチの巣作りについて説明を受けた。

夕食はホテル横のバーベキューが出来るスペースで、ロンダさんが作ってくださったチーズマカロニやハンバーガーなどを食べた。飲食店とは異なる、アメリカの家庭料理も体験出来た。

3. 目標達成度の自己評価

今回のプログラムを通して、一つ目の目的である日本人の果実摂取量を増やしていくためには果実に「手軽さ」が必要であると考えた。訪れたスーパーでは果物の品数に加えて、内容量の選択肢の多さやカットフルーツの多さにも驚かされた。消費者の需要に合った量を提供することに加えて、皮をむく手間がなく食べたいときにすぐに食べられるような工夫がなされていて感心した。

また、日常的に果実が頻繁にあることにも驚いた。宿泊したどちらのホテルにも朝食にそのままの日本よりも小さめのサイズのリンゴがかごに並べられていたり、リンゴやオレンジジュースが飲食店や学食で並べられていた。また、サラダの中にベリーなどの果実が入っていたり果物ベースのドレッシングがかかっていることもあった。

よって、果物を摂取する機会が多くあることや、果実のサイズが小さいことや加工品が豊富であることや料理にも上手く組み込まれているから日常的に気軽に食べられるのではないかと考えた。

実際に MSU の学生に果実をどれくらい頻繁にとるのかと聞くと、週に 2〜3 回だが、ジュースやジャムなど加工品でとることもあったと話しており、やはり果実自体を取る機会と共に、加工品の果実を食べる機会が多くあることが摂取量の多さに繋がっているのだと感じた。

これらのことから、日本の果実消費量を増やすためには、果実に「手軽さ」を導入していき、加工品や一人分をより広く販売することや、果実にデザートではなく、野菜のような料理に頻繁に使用される食材としての役割を与えることなどを行い、日本人の果実観を少しずつ身近なものへと変えていく必要があると考えた。

二つ目の目的である、専門用語に触れることは、多くの農場での説明や授業を通して達成できたと考える。自分の所属する農学部に関する内容や授業で習ったことに関係する説明は、わからない単語があっても話し手の目線や指をさしているもので何を伝えているのかわかることがあった。このことから、話し手のジェスチャーから伝えたいことを読み取る力も大切であると学んだ。

4. 今後の取り組み

日本の果実に「手軽さ」を浸透させていくには具体的にどのようなことをすべきなのか、アメリカだけでなく他の一人当たりの果実摂取量の多い国の果実の食文化についてさらに調べて参考にしていきたいと考える。

プログラム中に鍛えられたリスニング力やスピーキング力を落とさず、さらに向上させていくために映画を吹き替え字幕なしで見ることや、英会話を学んでいきたいと考える。

海外旅行を大学生の内に行ってみたいと考えているため、英語で外国人に話しかけられるような、英語力とコミュニケーションや積極性を鍛えていこうと考える。

5. その他

(ア)持っていて良かったもの

- ・ハンガー：何日か分をまとめて洗濯し乾燥機にかけるため十分に乾いてないことがあった、部屋干しする際に多めに持っていたため役立った。

- ・手帳とボールペン：農場等見学中に説明を受けるためメモをすぐ取り出せるようにしていると良い、また内容をすぐに読み替えられるようにしておくことで質問をしやすかった。

- ・予備の財布(ポーチ)：現金は盗難防止のため分割保管をしておく必要があるため役立った。目立ちにくい小さいポーチを使用した。

- ・ボディバック：盗難防止のためチャックがついていて、体の前側に持っていられると安心感がある、買い物の際に気が散らず店内を見て回れた。

- ・水筒：現地の水やお茶は高いため水筒を持っていくと節約ができてよかった。

- ・UV カットパーカー：農場等の見学やアメフト観戦など屋外に長時間いることが多い

ため日焼け対策に役立った。

- ・解熱剤・胃腸薬：体調を崩してしまった際にすぐに自分で対処できるため必要である。2・3日分ではなく余裕をもって持っていくべき。

(イ)用意したがいらなかったもの

- ・余分な服：洗濯は週に1・2回行えたことや、気温が高いこともあったため、長袖など着る機会がなかった服が複数あった。

(ウ)現地で使用したお小遣いの金額

クレジットカード 40ドル程度

現金 340ドル程度

6. 次年度以降の参加者へ

(ア)事前に準備した方がよいこと

- ・現地の学生と交流する機会が多いため自己紹介や所属している学科について話せるように準備しておくとうい。また相手にも学科の所属を聞いたり質問の例文をいくつか覚えておくと会話が弾んだ。

(イ)勉強しておくべきこと

- ・レストランや飛行機での簡単な受け答えを学び、事前にシミュレーションしておくとう本番にうまく受け答えが出来なくて焦ってしまうことが減る。

- ・アメリカのチップ文化について勉強しておくとう、何割出せばよいのか、どのうで出せばよいのか分かる。



Traverse City のホテルから見た日の出



MSU 園芸センターのリンゴ



ジャガイモ農場の貯蔵庫



スパルタンスタジアムのフィールド